

日本版マギーズセンター誕生への期待

「30年後の医療の姿を考える会」第4回市民公開シンポジウム開催

2月21日(日)に聖路加看護大学(東京都中央区)で「30年後の医療の姿を考える会」第4回市民公開シンポジウムが開催された。テーマは「メディカルタウンの再生力——がん患者が自分の力を取り戻せる支援とは? イギリスのがん患者支援、マギーズセンターから学ぶ」。

同会会長の秋山正子氏(白十字訪問看護ステーション)による「はじめに」のあと、柳田邦男氏(作家)から「日本におけるケアやサポートの取り組みを大きく進化させる次の道は日本版マギーズセンターの設立」と本シンポジウムの意義を称えるメッセージの代読が行われた。

マギーズセンターとは、イギリスのがんセンターなどの敷地内に、病院とは独立した建物として設置された相談支援施設。Maggie Keswick Jencks 氏の「病人ではなく一人の人間に戻れる、死の恐怖のなかにあっても生きる喜びを感じられる、小さな家庭的な安息所がほしい」との思いをきっかけに青写真を描き、がん患者が自分の人生を積極的に生きていけるような支援を提供するべく開設された。

寄付金を中心に運営されており、患者や家族、医療者など、がんの関係者が必要とする限り、無料で予約不要でサポートサービスを受けられる。

Maggie 氏の担当看護師で、いまはマギーズセンター最高経営者の Laura Lee 氏と、ビジネス開発ディレクターの Sarah Beard 氏による基調講演「マギーズ・キャンサー・ケアリング・センターの実践」が行われた。

Laura 氏は設立の背景とその経緯について発表し、環境が人々の不安を軽減するという観点から建築を大事にしていると語ったうえ、「初めてのマギーズセンターができるまで4年かかったが、努力と協力があれ

ばもっと早くできるかもしれない」と激励。

Sarah 氏はこれから20年程度でイギリス国内にある57のがん拠点病院すべてにマギーズセンターを設置したいという考えや、国外では初となる香港での設置計画についてふれ、「5年以内には国際的な存在になることを願っている」と話した。

また、運営資金に関しては、まず開設と3年間の運転資金として約300万ポンド必要と語り、「生きることの喜びキャンペーン」や3月26日を「マギーの日」と制定して資金集めを行なっている様子を紹介した。

パネルディスカッションでは、鈴木健彦氏(厚生労働省がん対策室)による相談支援センターやがん患者必携についての解説の後、患者の立場から海辺陽子氏(癌と共に生きる会)が日本では相談支援が機能していないことを課題として挙げ、がん患者がどのような段階であってもアクセスできるマギーズは希望のつまったセンターである、と大きな期待を表明した。宇都宮宏子氏(京都大学医学部附属病院)も「病院は治療の場で、患者さんが思いを語る空間・場がない」との気づきから、地域への取り組みをどのように行なっているかを紹介した。

続いてのディスカッションでは、鈴木氏に Laura 氏が英国保健省の Mike Richards 氏の発言として「がんサバイバーがどうケアされ、自己管理できるようにするかが大事で、そこでマギーズが大きな役割を果たす」とコメントを寄せる一方、司会から「患者支援センターが院内にあると『他の医療職に聞かれ、いま受けている治療にマイナスに働くのでは?』と考えた患者が気楽に話せなくなるなど、発揮できる機能に限界が生じる。がん対策基本法でも院外へのセンター設置を認めてはどうか」とのコメントも。

それを受けて鈴木氏が、「もとより院内・院外の規定はなく、あくまでセンターは『がん拠点病院に附属するもの』で、病院がどこにつくるかは自由である」と返答したところ、会場内から大きな拍手が沸き起こった。

ほかにも会場から「民間の運営であり、政府でもなく病院でもないことが大事だと思う」という発言がでたほか、患者が当事者としてやりがいをもって生きられ、遺族となった家族が経験を活かすことのできる島根県のがんサロンの取り組みが紹介され、日本版マギーズセンター誕生に近づく気運が会場にみなぎった。

同会顧問の樋野興夫氏(順天堂大学医学部教授)が Laura 氏らの来日をペリー来航になぞらえたが、日本版マギーズセンターの今後に定員超えの参加者それぞれが期待を抱いて本シンポジウムは終了を迎えた。

●問い合わせ先：白十字在宅ボランティアの会
FAX. 03-3268-1629

